

保育センスを理論化する保育記録の方法と活用

Utilizing Childcare Record Keeping to Create Nursery Know How Theory.

吉田 美恵子

キーワード 保育センス・保育記録の方法・記録の考察と活用

I 問題と目的

少子化・待機児童問題・保育士不足・保育士等処遇改善などが、国会でも議論されているが、本学専攻科保育専攻授業に於いては「基礎的・汎用的能力」に基づく教育実践の方向性を明確にし、質の高い保育者養成に努めなければならないと考えている。養成校に教育課程があるのと同じく、保育現場には各園の保育課程・教育課程があり、保育理念・保育の目標・保育の内容、方法がその園の独自の創意工夫により作られている。それは、保育所保育指針・幼稚園教育要領・幼保連携型認定こども園教育・保育要領を基盤として、園の実態にあった養護と教育、あるいは教育の5領域が、子どもの発達に合わせて計画され、入園から卒園までの子どもの育ちを確かなものにしていくための根幹となるものである。ところが、問題と思えるのは、この根幹となる保育課程や教育課程の存在や内容すら認識していない現場の保育者も多く、保育の見直しや反省・改善について根拠となる保育の記録の活用や、それに基づく園内協議がなされていない状況が多いことである。

日々の保育実践の記録は園日誌・週日案を含む保育記録・個人記録・研究テーマによる記録・ビデオ記録・保護者との連絡帳など多いが、その記録をもとに職員全体で問題点や課題が共通理解されていない場合がある。記録は継続されることが基本であり、筆者の20年に及ぶ保育記録や各週の園長・主任のコメントは、今なお振り返りの原点や反省・保育の分析として読み返す事もある。記録は個人の反省改善だけではなく他者にも伝えられ、園全体の方向性にも反映されていく事によって、保育の質を高めていくエビデンスともなる。

保育者は、人として生きていく上での心の育ち「生きる力」の基礎を育む重要な任務を担っており、保育は乳幼児期の発達の特性を踏まえ環境を通して行われることは言うまでもない。子どもの発達や育ちは、就学前と以降では大きく異なる。乳幼児期は未分化であり、養護や教育内容が絡み合って遊びや生活の中で育ちが高まるものである。乳幼児期の子どもは発達の道筋も一人一人違い、保育者にその違いを十分に受容してもらいながら前進・後退を繰り返し成長するが、保育を考える上では曖昧さや矛盾を感じる事も多い。成果の捉え方が小学校以降とは全く違い、その子どもとの生活の中であってこそしか見えず、日々の子どもの姿から予測を行い、適切な環境を用意しタイミング良く援助をしていく保育センスが大切になる。実践力があっても記録として残せない、記録は理想的だが実践を伴わないなどの実情があり、保育が他者も含めて省察され、論理的に捉えられる事が少ない。子どもの実態と保育者の育ってほしいと願う思い（目標）がうまく絡み合った時、子どもは充実した遊びを発展させ、新たな発達をしていく。保育者間で子どもの育ちの連続性を確かめながら、更なる保育の構成がなされ園の理念や目標が達成されていくべきである。子どもを観る目や保育センスは、日々の子どもの丁寧な関わりとその記録の中から、理論的に考察され育まれていくものと考えられる。

本研究では、保育記録が保育センスを確かなものにしていく手がかりとなるという仮説のもとに検証していく事を目的とするものである。

Ⅱ 研究の方法

- 1 カリキュラムの構成と問題点
- 2 インターンシップ記録の分析と保育者の育ち
- 3 専攻科保育専攻 専蝶会（在学生と卒業生による協議）からのテーマ分析
 - ①「保育センスを理論化する保育記録の方法と活用」KJ法a型・KJ法b型による考察
 - ②「保育センスを理論化する保育記録の方法と活用」ワールドカフェを通して

Ⅲ 結果と考察

1 カリキュラムの構成と問題点

専蝶会の中でも保育目標を全員が共通理解していないと、保育のズレがでたり、「保育観・価値観が違って保育者のストレスになる事もある」「共通の考えや目標がないと保護者に説明ができない」などの意見があった。

以下の表は「保育課程」であり保育理念・保育方針及び目標を記入している。この保育理念は園の施設長が園の特色や伝統などを職員全員に伝えることが大切であり毎年変わるものではない。この理念のもとに園の方針や目標が設定される。関係機関との連携は子どもを取り巻く環境の変化から特に大切であり園の取り組み方が見えてくる。幼稚園から認定こども園に移行する場合は、教育課程から保育課程へと変わり、教育の5領域に養護が加わる。子どもの発達過程の区分は保育所保育指針の内容に合わせ区分されることが多い。この発達に沿ったねらいは、担当の保育教諭が担当経験の子どもの、ねらいを立てると同時に横の連携を見ていながら作成していく事が大切であり、育てようとしている全体像をまとめ、全員で理解・把握しながら繋がりのあるものにする事が大切である。

(図 1) 【保育課程】

保育理念		共通理解が大切	関係機関との連携					
保育方針								
保育内容		ねらい	発 達 過 程					
			0 歳	1 歳	2 歳	3 歳	4 歳	5 歳
養 護	生命の保持	指針のねらい						
	情緒の安定							
教	健 康							
	人 間 関 係							
	環 境							
育	言 葉							
	表 現							
食 育		園の特色をもとに 計画的に						
研 修 計 画								

専攻科生は授業の中で、担当の子どもの年齢の特性を調べたり、イメージしながら保育課程作成を体験しているが、その中でも横の発達の繋がりや検証に時間を要している。この作成を通して改めて子どもの援助の仕方や、育ちについて探求していくこととなるが、保育現場においてもこの事が基本となると考える。

(図 2) 【年間指導計画】

年間指導計画 (歳児)

年間目標		期			
		第Ⅰ期(Ⅰ月～Ⅱ月)	第Ⅱ期(Ⅲ月～Ⅳ月)	第Ⅲ期(Ⅴ月～Ⅵ月)	第Ⅳ期(Ⅶ月～Ⅷ月)
ねらい					
養護	生命の保持				
	情緒の安定				
教育	健康				
	人間関係				
	環境				
表現	言葉				
	表現				
環境構成					
健康・安全					
活動内容・行事					
保護者への支援					

(図 3) 【週日指導計画】

歳児月第週指導計画 (週案)

月 第 週 (月 日～ 月 日)							行事・家庭との連携
前週の子どもの姿				ねらい及び内容			
	日 (月)	日 (火)	日 (水)	日 (木)	日 (金)	日 (土)	
環境構成のポイント							
予想される活動							
記録反省							

年間指導計画は子どもの年齢別に計画され期案→月案→週日案と構成されるが、保育課程を基本に担当年齢クラスで協議決定されていく事が多い。更に計画が子どもの状態に合わせて柔軟に対応変更されなければならないが、常に報告連絡をしながら全体の育ちを確かめていく保育のマネジメントサイクルが重要である。

専攻科では、週間の日々の記録を記述しているが、園の全体像や保育の流れは捉えにくく子どもと自身のかわりの中から言葉かけや援助の方法を探っている。

《専攻科2年生のインターンシップ記録》

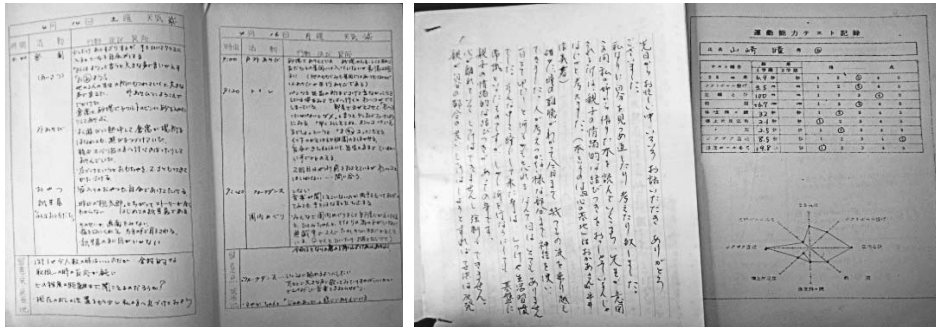
先週の幼児の姿		週のねらいと内容					
月 (30日)		火 (31日)	水 (1日)	木 (2日)	金 (3日)	土 (4日)	日 (5日)
環境構成		ステージ	ステージ	ステージ	ステージ	ステージ	ステージ
子どもの姿		ステージ	ステージ	ステージ	ステージ	ステージ	ステージ
保育者の記録		ステージ	ステージ	ステージ	ステージ	ステージ	ステージ

《1年生の記録》

期別		氏名		行事	1学期計画 1学期行事
7月	13日 22日	ねらい	予ての計画 1学期行事		
日(月)	日(月)	記録	反省・気づき		
13日 (月)		今日は年中組に参りました。園でグループ活動のやり方やお友達の話をきく機会をもちました。お友達の話をきくときは、目をみて話をきくことが大切だと学びました。また、お友達の話をきくときは、お友達の話をきくことが大切だと学びました。	今日は年中組に参りました。園でグループ活動のやり方やお友達の話をきく機会をもちました。お友達の話をきくときは、目をみて話をきくことが大切だと学びました。また、お友達の話をきくときは、お友達の話をきくことが大切だと学びました。		
14日 (火)		今日は年中組に参りました。園でグループ活動のやり方やお友達の話をきく機会をもちました。お友達の話をきくときは、目をみて話をきくことが大切だと学びました。また、お友達の話をきくときは、お友達の話をきくことが大切だと学びました。	今日は年中組に参りました。園でグループ活動のやり方やお友達の話をきく機会をもちました。お友達の話をきくときは、目をみて話をきくことが大切だと学びました。また、お友達の話をきくときは、お友達の話をきくことが大切だと学びました。		
15日 (水)		今日は年中組に参りました。園でグループ活動のやり方やお友達の話をきく機会をもちました。お友達の話をきくときは、目をみて話をきくことが大切だと学びました。また、お友達の話をきくときは、お友達の話をきくことが大切だと学びました。	今日は年中組に参りました。園でグループ活動のやり方やお友達の話をきく機会をもちました。お友達の話をきくときは、目をみて話をきくことが大切だと学びました。また、お友達の話をきくときは、お友達の話をきくことが大切だと学びました。		
16日 (木)		今日は年中組に参りました。園でグループ活動のやり方やお友達の話をきく機会をもちました。お友達の話をきくときは、目をみて話をきくことが大切だと学びました。また、お友達の話をきくときは、お友達の話をきくことが大切だと学びました。	今日は年中組に参りました。園でグループ活動のやり方やお友達の話をきく機会をもちました。お友達の話をきくときは、目をみて話をきくことが大切だと学びました。また、お友達の話をきくときは、お友達の話をきくことが大切だと学びました。		
17日 (金)		今日は年中組に参りました。園でグループ活動のやり方やお友達の話をきく機会をもちました。お友達の話をきくときは、目をみて話をきくことが大切だと学びました。また、お友達の話をきくときは、お友達の話をきくことが大切だと学びました。	今日は年中組に参りました。園でグループ活動のやり方やお友達の話をきく機会をもちました。お友達の話をきくときは、目をみて話をきくことが大切だと学びました。また、お友達の話をきくときは、お友達の話をきくことが大切だと学びました。		

専攻科1年次は、1週間自分なりの視点で毎日の記録をつけていくが、2年次は1週間の流れが読み取り易いように記入し、環境構成の変化も記録に残すようにしている。園内での話し合いの場・時間の確保が難しく、ねらいの立て方も繋がりがみられない場合が多い。環境の構成や子どもの生活は区切りを失くした方が流れが分るが、専攻科生は保育の連続性が捉えられていない場合が多い。

《筆者一高度難聴児 Y 子の個人記録》



筆者が幼稚園勤務10年目に担当したY子の個人記録・保護者の手紙・Y子の体力測定記録である。この他に母親とやり取りをした手帳も残している。高度難聴児の理解や対応に悩みながら、手話を選ばず言葉の獲得を望んだ母親との緻密な連絡で保育者として学ぶことが多かった。様々な工夫を保育に取り入れ、卒園時は会話も成り立った。経緯を今読み返しても、保育やこども同士の力、親や周りの援助のあり方などを探る大切な資料である。Y子は小・中・県立高校に進学し、現在一般職についている。

2 インターンシップ記録の分析と保育者の育ち

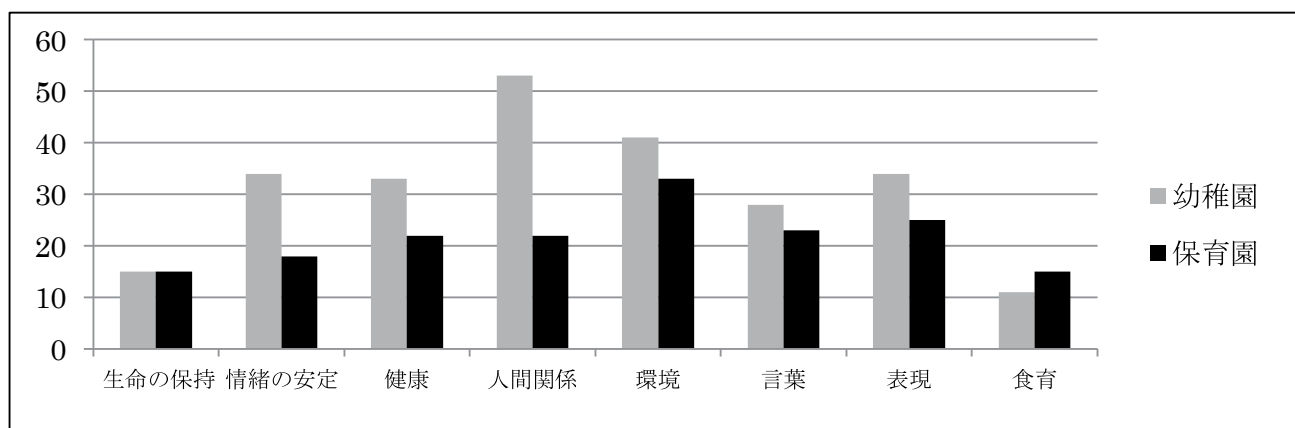
《平成27年度 専攻科学生のインターンシップの1年間の記録の分析より》

インターンシップ記録内容は、1年次は各自が研究テーマや課題とするねらいを持って自分なりに継続して記録していく事を目的とし、インターンシップ先での問題点を授業の中で議論しながら保育を深めていく。2年次には1年次の記述内容を整理した上で、記述の少なかった項目にも留意し、新たな課題を持ち一週間を通して子どもの生活の連続性を意識して記述する。

《専攻科生のインターンシップ記録内容を養護と教育に分けて考察する。(複雑に絡み合った内容も多く重複もある)》
(表 1)

学 生	養 護		教 育						合 計
	生命の保持	情緒の安定	健康	人間関係	環境	言葉	表現	食育	
2年生 A 幼	31	28	61	43	67	17	43	13	303
2年生 B 保	14	27	29	36	65	37	27	16	251
2年生 C 保	20	18	15	11	14	11	12	13	114
2年生 D 保	14	13	30	17	35	16	25	15	165
1年生 E 幼	10	39	27	87	41	58	46	9	317
1年生 F 保	13	12	14	25	17	27	34	16	158
1年生 G 幼	3	34	11	30	15	10	12	12	127
合 計	105	171	187	249	254	176	199	94	1435

(図 4) 《平成27年度 学生のインターンシップ記録記述内容の傾向》



インターンシップ先が保育園の場合の記述は養護と教育共に平均して記述がなされていたが、全体的に内容が浅く子どもの反応の記述が少ない。乳児の関わりに戸惑いがありインターンシップが受動的な内容で記述されている。幼稚園の場合は教育に関する記述内容が多い。3歳から5歳児の個～集団への萌芽の時期に人間関係や環境に係る記述が多くなり、子どもとの関わりや援助の方法が書かれている。考察部分は学生の個人的な感情でなされている場合が多く、1年次から2年次に進むにつれて、子どもの生活の読み取りが理論づけされていく傾向にある。本年度は授業内で、学生なりの課題を持ちこむ事が少なく、主体的に実践できていない反省がある。インターンシップ記録内容が質・量共に充分であったのは学生Dであり、次いで学生Eであるが学生Dの記述合計は165となっている。学生Dの記述内容は視点が絞られ園の環境保育重視の傾向が反映されている。

学生C・学生Gは記述量・質共に改善を要した経緯があり、学生Cのインターンシップ先では、クラス担当ではなく、全体の安全への配慮や見守りが役割である為、子どもの姿が捉えにくく、記録内容が単調であった。又、学生Gは情緒的な関わりが多く、記録内容も保育者の態度や言葉に対する子どもの情緒安定や、ストレスといった記述が多い。学生自身の保育への戸惑いや不安定さも感じられ、2年次での課題が大きい。

《記録を残し、整理する事で専攻科2年生の気づきは以下のようにになっている。》原文のまま

【A】 最初は記録の必要性も感じていなかったが、書いているものを見返していくうちに自分が子どもや先生に対してどんな対応をしていたり、どんな助言をいただいていたのかが一目でわかり復習になった。更に自分がどんな事に気づいているのか、気づいていないのか、がわかり次にどんな事をすれば、よい保育になっていくのかが考えやすくなった。

【B】 ねらいが余り記入出来なかったが、保育を行っていく中でねらいを持って過ごすのとそうでないのでは、保育の達成感や充実感が得られないし、子どもを見る目にも変化がでると思った。インターンシップ記録を2年間つけることで、自分の保育の振り返りを行うことができた。振り返り、反省を行うことで次の機会に生かすことができた。文章を書くことで自分の考えや思いを表現することが大分出来るようになったと感じる。

【C】 もっと具体的な内容を盛り込みながら自らの主観を含ませつつ、日頃の保育がどういうものだったかを書ければ良かったと思う。どうしても、文章なり、言葉にする際には客観的というか、引いた感じでというか冷めた目という感じで書いたり、話したりしてしまう。しっかり書くことを癖にしないといけないと感じた。今後、児童の記録・要録・週案・月案・年間の指導計画を書くことにもなり、しっかりしないといけないと思っている。働き始めたら保育の記録はしっかりと取りたい。研究の部分にも使えると思う。

【D】 初めは何を書いたら良いかわからなかったが、徐々に子どもたちの姿や保育者の動き、環境等を見て記録出来るようになり、観察眼が養われた。また、起こった出来事を書くだけでなく、その出来ごとについて何故そうなのか、何が身につくのか、何のためなのか、より良い方法はないのか等その背景まで深く考えることが出来るようになった。私はその日印象に残った出来ごとのワードだけメモして、後日まとめて記録する事が多かった。毎日こつこつ記録を残していけるようにしていきたい。子どもたちの姿からしっかりねらいを持って保育できるように、ねらいの立て方も学び直していきたい。

2 専攻科保育専攻 専攻会による「保育センスを理論化する保育記録の方法と活用」について

第2回専攻会 平成28年2月27日(土)1部 PM3:00～5:30 長崎短期大学第三合同

参加者17名(在学生7名 卒業生10名)

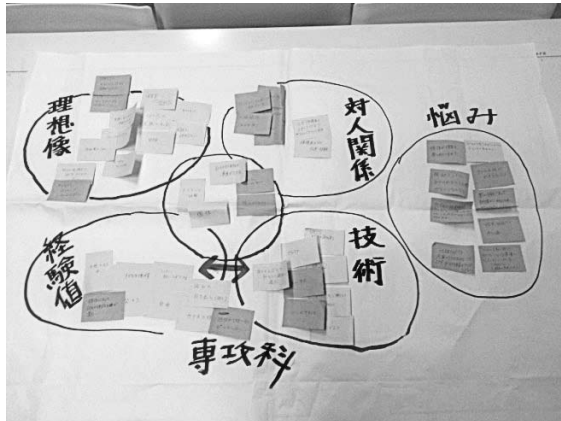
①「保育センスを理論化する保育記録の方法と活用」についてKJ法a型・KJ法b型による考察

《自由な雰囲気中で、他を批判せずに発言していき、ブレインストーミングでの発想をポストイットに書き込み、データを分類・図解する(KJ法a型)》

【保育記録】 ポストイット データ (33枚より)		+ イメージ 14枚	- イメージ 19枚
A 書類が多すぎて眠る暇がない (日案・月案・保護者への便り)	K 記録を書くことで気づく事が多い		
B 遊びの繋がりや子どもの考えが見えてくる (関係3枚)	L 毎日の自分の保育の振り返りができる (関係5枚)		
C 保育園では小さい頃の成長が見れてよい (関係2枚)	M 子どもの姿が見えるようになる		
D 1年間を通しての成長が判り易い	N 達成感		
E 論文を作成する時に振り返る事ができる	O 足りなかった所や伸びていない所がわかる		
F クラスの人数が多いと全員の一日の様子が見られない	P 表面だけ見てつけていないか		
G 記録をためこんでしまいそう	Q 他人から見れば記録がその子の印象に		
H 毎日継続して書くのが大変 (関係4件)	R 書き方が難しくてわからない		
I 表現力が問われる	S 記録を分野に分けるのが大変		
J 自由保育だとその子が1日何をしたかわからない	T 意味のある記録か?		
			等
【記録の活用】 ポストイット データ (22枚より)		+ イメージ 16枚	- イメージ 6枚
A 保育の改善につながる	K 日記感覚であったことを残す感じでもよかった?		
B この子少し怪しい!と思った時に見ることができる	L スムーズに進級できる		
C 職員間で共有、カンファレンスの議題になる	M 子どもを知る,理解する事になり、より好きになる		
D 個人記録から他の先生の意見がきける	N 今後の自分の保育に役に立つ		
E 発達センターとの連携で、記録をたよりに、その子の行動の特長を発見できる	O その場で記録ができないと後からでは、その出来事を鮮明に記録する事ができない		
F 他の職員と共有する事ができる (関係2枚)	P 答えがない		
G 保護者への還元	Q 記録を生かしたくても生かせないと嫌になる		
H 前日とは違う (発展) 保育ができる	R 子ども個人の発達段階がわかる		
I 小との連携や幼でしていることを理解してもらうきっかけ	S いかせている人をみると自己嫌悪		
J どう生かしたらいいのやら? 知識・経験・スキルが必要	T 要録書いても小が見てくれているか? 参考にしてくれるのか		
			等
【保育センス】 ポストイット データ (52枚より)		+ イメージ 14枚	- イメージ 19枚
A 笑顔が素敵な人は保育センスがある (関連4枚)	K 変化を楽しむ		
B 情緒豊かである	L 予想できる力		
C 子ども一人一人にゆっくり向き合う時間がない	M ひらめき		
D ユーモアのセンスがある	N 担任によって子どもの伸びる力が違う		
E 子どもの主体性の尊重が出来る	O 沢山の引き出し		
F カリスマ性がある	P 上司・保護者とうまく付き合う		
G 保育室の雰囲気	Q ピアノがさっと弾ける		
H 子どもへの理解	R 担任が保育を楽しめているか?		
I 先生によって子どもの態度が違って来る	S 園の方針に納得がいなくてもそうしなければ		
J 子ども一人一人にゆっくり向き合う時間が少ない	T 子どもの言動に対して待てない環境になってしまうことが多い (時間がないと保育者が先走る)		
			等

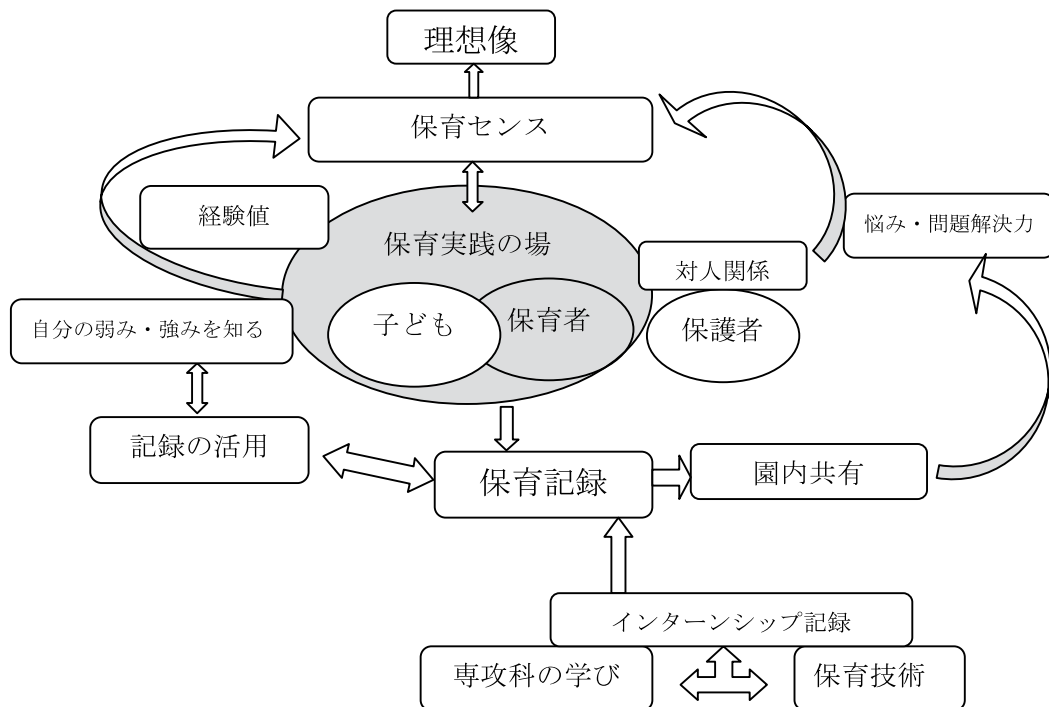
《卒業生によるデータの分類と図解化を行いながら整理していく》

(図 5)



1	ポストイットデータを分類
2	小グループから中グループに分ける
3	それぞれにタイトルをつけていく
3	繋がりを探る
4	図解する

(図 6)



《図解からの考察》

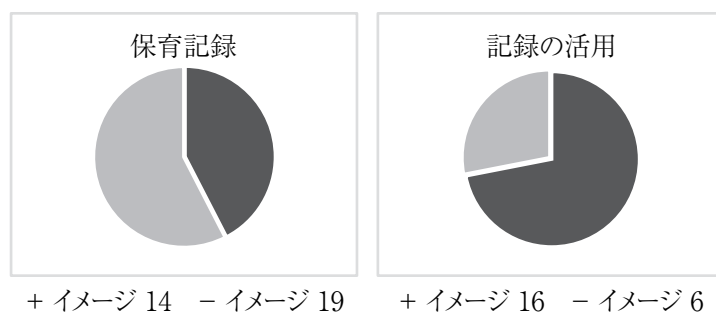
在學生は、日々の学びや保育技術をインターンシップの中で生かし、記録に残しているがその中からテーマを分析してみた。又、卒業生は日々の保育実践の中からのテーマ分析とした。【保育記録】に於いて在學生は、記録の際の文章力の未熟さや、記録のため込みもあり継続の大変さを感じている。卒業生（保育者）は子どもと保育者の関係や、保育のみとりが場面ごとに細かく記憶されているが、毎日の複雑な業務も加わり記録を書くことに難しさを感じている。又、子どもの人数に対しての記録、保育の形態による保育の視点の迷いを感じられる。（図 7）により、保育記録のイメージは田のイメージが強いが、記録の活用としては田のイメージが強くなり、記録は難しいが保育の質を高める上でも重要だと考えているのが読み取れる。【記録の活用】の中で、C 職員間で共有、カンファレンスの議題になる D 個人記

録から他の先生の意見がきける、等のように記録をもとに協議ができる環境がある場合と、逆にQ記録を生かしたくても生かせないと嫌になる

Jどう生かしたらいいのやら？知識・経験・スキルが必要とあるように、個人だけの記録、自己評価だけになると保育の視点が狭くなり、課題を解決できないままで、子どもに対しての余裕ある対応が出来なくなって

いる記述がみられる。子どもの育ちを見る目はミクロとマクロの視点が欠かせない。【保育センス】については、卒業生はリカレント生2名（経験年数8年）他は、勤務年数5年以内であり、知識や経験が保育センスにも繋がっていると捉えており、図解に経験値として表示している。又、子どもの主体性の尊重や子ども理解、予測出来る力、保育者が保育を楽しめているか？等をあげているが、子どもだけでなく保育者同士、保護者との人間関係を良好に保てるのも大切な事と捉えている。在学生は、保育センスをまだ表面的な技術等で捉えており、本質的な捉え方が不足している。

(図 7) ■ + イメージ □ - イメージ



②「保育センスを理論化する保育記録の方法と活用」のテーマをもとにしたワールドカフェを通して



【ワールドカフェ（1時間）の手順】（4人1グループ）×4 ファシリテーター（吉田）

1 ラウンド 20分

- ・議論の中で浮かんだ自分のアイデアをテーブル中央のシートに貼って行く
- ・1人残り（ホスト）移動する（ゲスト）

2 ラウンド 20分

- ・残った一人が前ラウンドの内容を話す
- ・後は同じ形式でテーマを深める

3 ラウンド 20分

- ・もとのテーブルに戻って気づきや発見を統合する

【ワールドカフェの内容】

1 ラウンド 20分

各グループに専攻科生と卒業生がバランスよく分かれ、専攻科生の緊張を卒業生が温かく受け止めており、次第にリラックスした雰囲気の中で、インターンシップの体験などを卒業生が聞いているグループ・テーマ分析から入っているグループ、卒業生の現場体験を専攻科生が聞いているグループなどがあり、思いついた事を紙に書きテーブル中央のシートに貼っていく。

2 ラウンド 20分

各グループの残った一人は卒業生で、前ラウンドの内容をわかりやすく伝えている。新グループ参加者は1ラウンドでの内容を踏まえて意見交換が始まる。卒業生は極力自分の意見を押さえて専攻科生の意見を引き出そうとする姿があるが、ステップアップを図れる適切な反応を示し、新たな課題への協議へとリードしていた。例) 専攻科生・・・行動が遅い子は遊ぶ時間が少ない。遊べない。

卒業生・・・行動が遅い理由は何だろう？遅くていけない理由は？

その子のどんな場面が他にある？職員同士の理解は？

3ラウンド 20分

ワールドカフェのスタートのテーブルへ戻り、気づきや発見を伝え合う。ここから議論が盛り上がり時間になっても活発な話が終わりそうになかったが、テーブルのメモを整理し、意見を統合するよう指示する。それぞれのポストイットデータを分類しグループの意見をまとめていながらも、議論は続く。

(例) *運動会やお遊戯会等の前になると、させなければならない事に追われて口調が強くなったり、子どもを怒ってばかりいる。

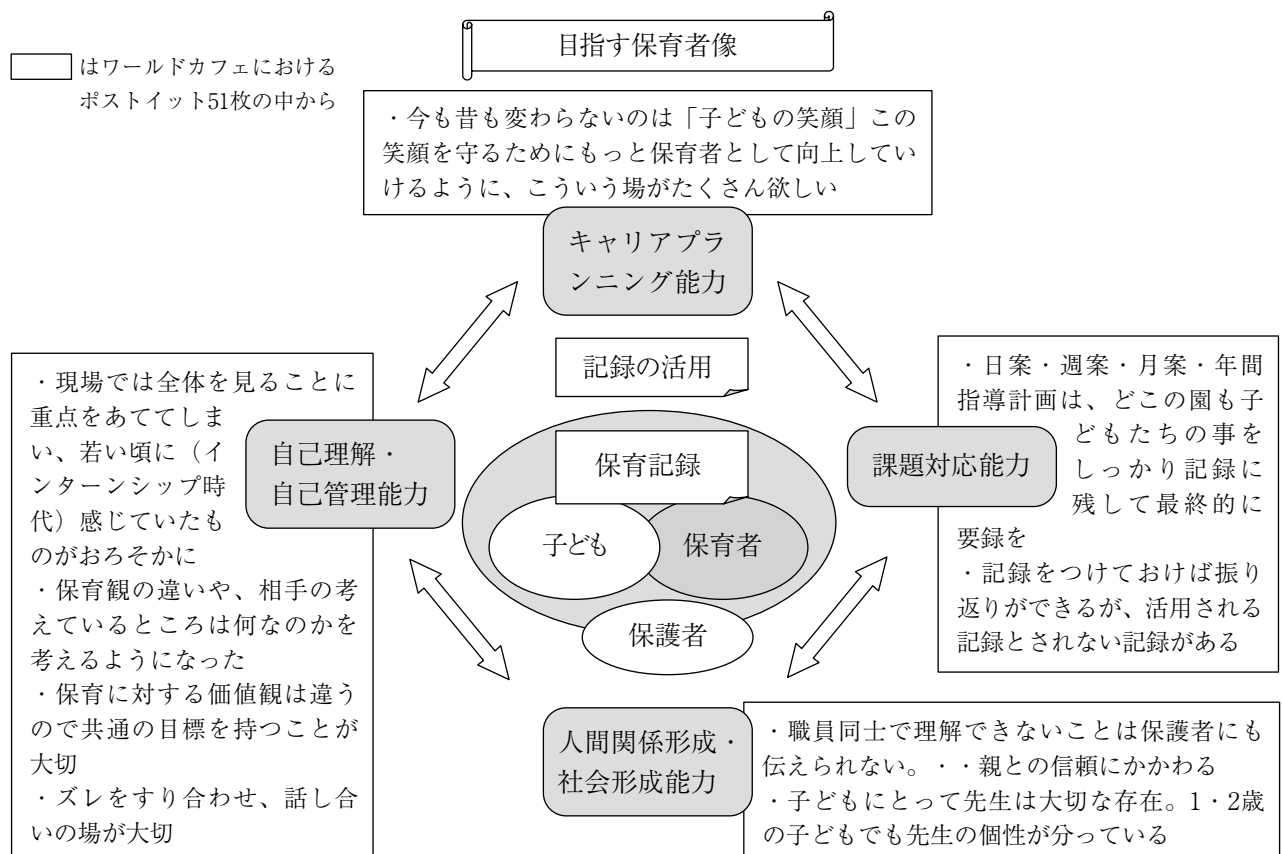
*えっ？毎日の生活の中から運動会の種目やお遊戯会の内容を子どもと考えるのではないの？

通常第3ラウンドで各グループの話題は共有できていることになるのだが、最後のまとめとして、各グループの内容が聞きたいとの意見が出て、各グループの移動しなかった卒業生が内容を伝える。まとめた内容は(図 8)で示している。

【ワールドカフェを通して】

(図 6) 及びワールドカフェのまとめを通して「基礎的・汎用的能力」を構成する4つの能力について(図 8)で整理する。

(図 8)



—文部科学省 キャリア教育とは何か 第1章 第2節より—

(ア) 人間関係形成・社会形成能力

「人間関係形成・社会形成能力」は、多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成する事ができる力である。

(イ) 自己理解・自己管理能力

「自己理解・自己管理能力」は、自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力である。

(ウ) 課題対応能力

「課題対応能力」は、仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決する事ができる力である。

(エ) キャリアプランニング能力

「キャリアプランニング能力」は、「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力である。

IV まとめ

専蝶会でのKJ法やワールドカフェの体験で、保育者としての具体的な行動内容や思考が整理され、(その内容には「基礎的・汎用的能力」が含まれているがこれは区分されることではなく相互に関連性がある)参加者自身の方向性がみられるようになり、保育を語る楽しさが増したことは大きな成果となった。

専蝶会実施後、平成28年3月2日(水)専攻科2期生が就職している「国立O大学附属幼稚園」を訪問した。園児数156名。3・4・5歳児が在園し、卒業生は3歳児クラスの担任である。どのクラスに入っても子どもたちは主体的に多くの言葉や意見を発し、賑やかに子どもの生活を繰り広げていた。4歳児クラスでは、自分たちで考えた劇を、その日の自分の考えで役割を選び、子どもなりのアイデアで進めている。あきらかに先生の発言が少ないが、要所所で短く端的に助言される言葉に大きな意味があった。壁面も子どもにより作られ、一見内容が分らないが、子どもと話しているうちに一つひとつが鮮明に理解できた。園長先生は、日頃の子どもの姿を楽しそうに解説され、園全体で子どもの状態や保育の内容が把握出来ており、先生方の声かけのタイミングと教材の準備や環境構成に保育センスの高さを感じた。4時間の訪問の間、丁寧に対応していただいた園長先生から「幼大連携」の興味深い内容を聞くことができた。園長先生も含め、「教職員の弱み・強みを理解し、出来ることを積極的に実践していく」、又、「先生方の毎日の記録を整理して、理論的に繋いでいく事、そしてその中の様々な問題点を大学との連携で解決していく」と話された。幼稚園の紀要には、細かい実践の記録と省察が記述されていた。記録をどう読み取るのか、その事も含めて大学との連携に着手されている。

保育の記録は必要不可欠であるが、どう生かしていくかが大切になる。文部科学省 幼稚園教育指導資料第5集「指導と評価に生かす記録」第3章—記録を指導や評価の実際に生かす—の中で、

- | | | |
|-------------------|----------------|-------------------|
| 1. 記録から指導の過程を評価する | 2. 教材研究に生かす | 3. 記録を指導計画の改善に生かす |
| 4. 記録を評価に生かす | 5. 記録を園内研修に生かす | 6. 保護者との連携に生かす |
- とある。

専攻科のインターンシップ記録は、継続して記録をつけることで学生自身の子どもを見る目が育っている事は確かであると同時に、自分に足りないもの、学ばなければならない自己課題も見えてくる。筆者の保育記録の変遷は慙愧にたえないが、学生に伝え、子どもと向き合う重い責務を、丁寧に記録に残すことを伝えていき

たいと思い開示している。記録をとる方法や内容は、保育のみとりの力との関連がある。必ずしも経験年数が長いから良質という事でもない。記録は活用する事によって保育の質が高まり、そこから生まれる保育センスが子どもの育ちを確かな方向へ導く。又、その繰り返しの中から保育センスが磨かれていくといえる。

学生が保育を記録していく過程から、各自に沿った迷いや課題を読み取り、保育者としての育ちの過程を、学生自身が認識出来るようにし、問題解決の為の方法や理論を探り、人間性豊かな質の高い保育者養成に努めることが、筆者自身の課題である。

【付記】 本研究は長崎短期大学平成 27 年度傾斜配分研究費より助成を受けている

* 参考・引用文献

- ・文部科学省 キャリア教育とは何か 第1章 第2節
- ・文部科学省 幼稚園教育指導資料第5集「指導と評価に生かす記録」第3章
- ・「対話と保育実践のフーガ」加藤 繁美 ひとなる書房
- ・幼保連携型認定こども園「教育・保育要領に基づく 自己チェックリスト」保育総合研究会 世界文化社